

基盤研究 B 「CEFR の文脈化と日本語・日本語教育研究への応用」

2021 年度の活動報告

小野正樹（筑波大学）

要 旨

2021 年度より採択を受けた科研費基盤研究（B）研究課題「CEFR の文脈化と日本語・日本語教育研究への応用」と、関連外部資金に基づく研究の 2021 年度に行った諸活動について報告する。具体的活動報告として、2021 年 8 月に本研究課題の検討会として開催した、オンラインシンポジウム「第 3 回未来志向の日本語教育」（第 3 節）、第 13 回日本語コミュニケーション研究会の内容（第 4 節）、2021 年 11 月に日本語語彙辞書を利用した新たな研究（第 5 節）、発話・会話例の検索ができる日本語教育コンテンツ「にほんごアベニュー」の開発状況（第 6 節）などについて報告する。

キーワード: 日本語らしさの数値化、辞書、CEFR、日本語教育コンテンツ

1. はじめに

2021 年度 4 月に科学研究費補助金基盤研究として、(B) 研究課題「CEFR の文脈化と日本語・日本語教育研究への応用」の採択を受けた。本科研は、大きく 2 つの方向性を有しており、1 つは大学生を対象とした参照枠組み作成とその文脈化記述で、もう 1 つはそれに基づく日本語教育コンテンツ開発である。この教育コンテンツ開発には、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター(CEGLOC)日本語・日本事情遠隔教育拠点（拠点長 小野正樹）、JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」（代表 小野正樹）の支援も受けて、開発を進めている。

本プロジェクト報告は「日本語コミュニケーション研究会」の会誌「日本語コミュニケーション研究論集」第 11 号に収録されているが、この論集は、本研究課題の研究代表者（本稿の筆者。以下同じ）、並びに基盤研究 (B) 「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」（研究代表者：山岡政紀氏）、基盤研究 (C) 研究課題「日本語学習者のポライトネスに関わる言語運用についての基礎的研究」（研究代表者：牧原功氏）の 3 課題合同の科研費報告書を兼ねている。

2. 本研究課題の概要

本研究課題の概要は以下の通りである。

研究課題：「CEFR の文脈化と日本語・日本語教育研究への応用」

研究課題（英文）：Contextualization of the CEFR and its Application to Japanese Language and Japanese Language Education Research

研究期間：2021 年～2025 年（4 年間）

研究種目：基盤研究（B）

研究課題/領域番号：21H00534

16,380 千円 (直接経費: 12,600 千円、間接経費: 3,780 千円)

2021 年度: 4,030 千円 (直接経費: 3,100 千円、間接経費: 930 千円)

キーワード：わかりやすい日本語 / 場面 / 発話機能 / データベース

研究代表者：小野正樹 (筑波大学)

研究分担者：

山岡 政紀 創価大学, 文学部, 教授 (80220234)

牧原 功 群馬大学, 国際センター, 准教授 (20332562)

朱 ヒョンジュ 目白大学, 外国語学部, 専任講師 (90822750)

山下 悠貴乃 十文字学園女子大学, 教育人文学部, 講師 (10845457)

Vanbaelen Ruth 筑波大学, 人文社会系, 准教授 (70514016)

伊藤 秀明 筑波大学, 人文社会系, 准教授 (70802627)

文 昶允 筑波大学, 人文社会系, 助教 (60845030)

Chauhan Anubhuti 筑波大学, 人文社会系, 助教 (00872839)

以上 8 名

参考 URL : <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21H00534/>

3. 第 3 回 オンラインシンポジウム「第 3 回未来志向の日本語教育」

3.1 概要

シンポジウム「未来志向の日本語教育」は 2019 年 2 月 16 日に第 1 回シンポジウムが開催され、2021 年 8 月 6 日が第 3 回であった。本シンポジウムの趣旨は「21 世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのかを大きなテーマとし、幅広い分野の研究者に発表および意見交換の場」で、主催は筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター (CEGLOC) 日本語教育部門で、発表者には学外研究者も募り、採択の基準を有している。

3.2 構想発表：日本語におけるわかりやすさの客観的評価への試案

本科研のメンバーに加えて、小野が研究代表を務める JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」の RA でもある日暮康晴氏 (筑波大学大学院・大学院生) が、代表として「日本語らしさとわかりやすい日本語とは何か」という題目で発表を行った。主張は次の 3 点である。

(主張 1) 国内外の日本語学習者の目的に合った教育内容・教育方法開発が課題で、抽象的なスタンダードではなく、スタンダードに沿った具体的な日本語の記述が必要となっている。Council of Europe の「Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR)」に基づいた学習目標設定は必要にしても、どのような CEFR の Can-Do 記述が必要かは、学習される国・地域により異なる。

(主張 2) 現実場面でどのような表現形式が使用可能かの記述はなされていないため、学習者も自律的に学ぶことが難しかったり、経験の浅い日本語教師にはとまどうことも多く、

解決策が必要となっている。

(主張 3) 解決の一助となるべく、将来的には自動計算も可能な、日本語らしさの評価測定計算式を策定中である。

4. 第 13 回日本語コミュニケーション研究会報告

4.1 概要

2021 年 8 月 26 日 (木) 27 日 (金) の 2 日間にわたり、第 13 回日本語コミュニケーション研究会を Zoom オンラインにて開催した。以下、研究会の内容については、山岡政紀(2022)「日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(4)—2021 年度の活動報告—」に詳細がある。

この研究会は研究代表者小野と研究分担者山岡政紀氏、同牧原功氏の三者がそれぞれの科研費研究課題を持ち寄って行う合同研究会として、2011 年 2 月に第 1 回を開催して以来、毎年開催し、今回は第 13 回目となるものである。研究会のプログラムは下記の通りで、時間帯のあとに☆印のあるものが本科研の課題関連の発表である。

8 月 26 日 (木) 午前：第 1 セッション

- ① 10:10 - 10:40 齊藤幸一 (大阪電気通信大学)・嶋田みのり (東北学院大学)・宮原千咲 (広島修道大学) 助言における配慮表現
- ② 10:45 - 11:15 ☆ Vanbaelen Ruth (筑波大学) オンライン授業に関するアンケート結果：3 学期分の比較
- ③ 11:20 - 11:50 齊藤信浩 (九州大学) 時間的近接性を表す従属節のソバカラについて

8 月 26 日 (木) 午前：第 2 セッション

- ④ 13:00 - 13:30 山岡政紀 (創価大学) [基調報告] 配慮表現データベースの現状と将来構想
- ⑤ 13:35 - 14:05 牧原 功 (群馬大学) 話題転換とポライトネス
- ⑥ 14:10 - 14:40 大和啓子 (群馬大学) 補助動詞「～ておく」の諸用法

8 月 26 日 (木) 午前：第 3 セッション

- ⑦ 14:55 - 15:25 宮原千咲 (広島修道大学) 確認場面における配慮表現
- ⑧ 15:30 - 16:00 李 丹 (創価大学) 日本語の配慮表現とその中国語訳からわかること
- ⑨ 16:05 - 16:35 西田光一 (山口県立大学) 英語の定型表現の談話機能と語用論の範囲の限定

8 月 27 日 (金) 午前：第 4 セッション

- ⑩ 10:40 - 11:10 ☆ チョーハン アヌブティ (筑波大学) 日本語とヒンディー語における自己表現—量的研究の観点から—
- ⑪ 11:15 - 11:45 ☆ ニノ宮崇司 (アルファラビ・カザフ国立大学) 日本語における禁止の注意：日本語母語話者データとカザフスタン国籍を有する日本語学習者

データの対照分析

8月27日（金）午前：第5セッション

- ⑫13:00 - 13:30 ☆ 小野正樹（筑波大学）CEFRの文脈化と日本語・日本語教育研究への応用構想
- ⑬13:35 - 14:05 ☆ 朱炫姝（目白大学）・日暮康晴（筑波大学大学院）・山下悠貴乃（十文字学園女子大学）・伊藤秀明（筑波大学）・小野正樹（筑波大学）
「日本語らしさ」「わかりやすさ」の度合いが決まる要素について
- ⑭14:10 - 14:40 ☆ LE THI THU HA（筑波大学）日本語学習者による条件接続辞の使用実態
—I-JASのストリーテリングのデータの分析から—

8月27日（金）午前：第6セッション

- ⑮14:55 - 15:25 中後幸恵（創価大学大学院）補足の接続詞における配慮の考察 —「ただ」を中心に—
- ⑯15:30 - 16:00 金 玉任（誠信女子大学）前置きの用いられる「ね」
- ⑰16:05 - 16:35 李 奇楠（北京大学）を格構文の日中対照

4.2 構想発表：CEFRの文脈化と日本語・日本語教育研究への応用構想

前節の研究発表⑫と⑬について概略を報告する。⑫では小野が本科研の4つの目標を紹介した。

（目標1）「話者」「場所」「場面」「はたらき」の情報によって文脈化された発話・会話を収集し、データベース化して、学習・教育・研究に役立てるように工夫する。

（目標2）母語話者、非母語話者に、（目標1）で収集したデータの日本語らしさとわかりやすさの指標を示す。

（目標3）成果物として、（目標1）を活かした特定の教科書に準拠しない汎用性、文型から離れた機能性の観点からのオンライン教材開発を行う。

（目標4）（目標2）を活かし、やさしい日本語にもつながるわかりやすい日本語の指針提供を行う。

小野の紹介を承けて、発表⑬では研究分担者の朱炫姝氏が、（目標4）について、やさしい日本語にもつながるわかりやすい日本語の指針として、「フレキシビリティ度数（FF度数：Flexibility Frequency）」の提案を行った。「FF度数」とは、日本語らしい日本語として、母語話者による使用から、「使用度」（頻度・コロケーション）、わかりやすい日本語として、母語話者と学習者による判断「理解度」（難易度）「共感度」からなるものである。

また、本科研の研究協力者（海外）のメンバーで、JSPSアジア・アフリカ学術基盤形成「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」の参加大学アルファラビ・カザフ国立大学、ウズベキスタン国立世界言語大学、カイロ大学、フエ大学校との共同研究テーマの1つとして取り組んだ、日本語禁止表現について、二ノ宮崇司氏（アルファラビ・カザフ国立大学）が⑩「日本語における禁止の注意：日本語母語話者データとカザフスタン国籍を有する日本語学習者データの対照分析」として発表を行った。

5. シンポジウム 「日本語語彙辞書を利用した新たな研究」

5.1 概要

語彙辞書を介した言語研究、言語教育方法、教材開発の可能性を議論し、語彙、リーダビリティの難易度が何を表し、どのような分野で、どのように利用できるかを考えるシンポジウムを開催した。「リーディングチュー太」とは日本語読解学習支援システムで、日英、日独、日蘭、日西、日スロベニアの多言語辞書を備え、旧日本語能力検定試験の出題基準に合わせて、使用者が入力した文章に含まれる全ての単語と漢字の難易度レベル判定が行えるものだが、「リーディングチュー太」の運営を、2021年4月より筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター(CEGLOC)日本語・日本事情教育遠隔教育拠点で行っていることから、実現した企画である。開発者川村よし子氏(元東京国際大学)による「「リーディングチュー太」の現状と課題」という基調講演に続き、日本語教育、国語教育の観点から、研究発表が行われた。プログラムは以下の通りである。

シンポジウム

日本語語彙辞書を利用した 新たな研究

日時：2021年11月13日(土) 12:00-17:00
オンライン開催 (Zoom)、参加費無料 先着80名

- 基調講演 12:00-13:00
「リーディング・チュー太の現状と課題」
川村よし子(元東京国際大学)
- 発表1 13:10-13:40
「日本語学習者によるアカデミック・ライティングのための使用語彙調査
-名詞を対象として」
守時なぎさ(リュブリャーナ大学)
- 発表2 13:40-14:10
「発話機能から見た適切な日本語の数値化への試案」
小野正樹(筑波大学)・日暮康晴(筑波大学大学院生)
山下悠貴乃(十文字学園女子大学)・朱炫姝(目白大学)・伊藤秀明(筑波大学)
- 発表3 14:20-14:50
「日本語学習デジタルリソースのコストパフォーマンスについての検討」
伊藤秀明(筑波大学)・山田智久(西南学院大学)
- 発表4 14:50-15:20
「小学校の説明的読み物の語彙」
矢澤真人(筑波大学)・古谷梨菜(筑波大学大学院生)
- 発表5 15:20-15:50
「国語教育における難易度研究の活用」
橋本修(筑波大学)
- 全体質疑 16:00-17:00 進行：文昶允(筑波大学)・波多野博顕(筑波大学)

参加申込： <https://forms.gle/aPGwUGQDkueGHqL7>
参加申込締切日：2021年11月7日(日)

お問い合わせ
日本語・日本事情遠隔教育拠点
jp-kyoten@un.tsukuba.ac.jp

参加申込QR

主催：筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点
共催：筑波大学ICR、JSPSアジア・アフリカ研究拠点「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」、筑波大学近未来型日本語アシストシステム構築プロジェクト、筑波大学リサーチグループ「言語研究の実践的応用」、筑波大学リサーチユニット「語彙研究と国語辞書研究の相互活性化」、基盤研究(B)21H00534「CEFRの文脈化と日本語・日本語教育研究への応用」、基盤研究(C)20K00718「ICT活用授業の教育効果測定に関する総合的研究～連関モデル構築の試み～」、筑波大学人文・文化学群

〈図1〉「日本語語彙辞書を利用した新たな研究」ポスター

発表 2 では、小野が数値化と人文研究の関係について、伝統的人文分野の研究記述は、元来主観的な研究要素が強く、数値化の手法、さまざまな分野のアルゴリズムの枠組み（表には見えない無数のコードのつながり）と、どこまで向き合うかが、理論、記述、そして、社会実装への鍵概念と考え、本科研で取り組んでいる「FF 度数」の紹介を行った。

6. 日本語教育コンテンツ「にほんごアベニュー」開発状況について

6.1 概要

国内外の大学生の日本語学習者を対象として、コミュニケーション目的に合った教育内容・教育方法の解決のために、学習者ベースの教育コンテンツ「にほんごアベニュー」の開発に取り組んでいる。日本語教師と日本語学習者双方が使える方向性を考え、Council of Europe の「Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR)」に基づいた学習目標設定に基づいた行動レベルのスタンダードだけではなく、スタンダードに沿った具体的な日本語を提供するものである。教育の課題と現代の With コロナ禍の状況で、日本語母語話者との接触が少なくなる現状を考慮し、「話者」「場所」「場面」「はたらき」の情報によって文脈化された発話・会話をデータベース化し、学習・教育・研究に役立てるように工夫したもので、特定の教科書に準拠しない汎用性、文型から離れた機能性重視のオンライン・日本語教育コンテンツで、2022 年度に公開予定である。



〈図 2〉日本語アベニューのログイン画面

6.2 「にほんごアベニュー」のコンセプト

CEFR に基づく「CAN-DO リスト」の作成は、複数言語で活発に研究・開発がなされ、日本語教育においても、国際交流基金「JF 日本語教育スタンダード」、東京外国語大学「JLC 日本語スタンダード」など授業設計、評価を考えるための枠組提案、日本語学習者の到達目標基準が示されている。しかしながら、特定の状況でどのような日本語でコミュニケー

ションがなされるのかという具体的な記述がなく、日本語教育の現場では使用しにくいという批判がある。JF 日本語教育スタンダード」の生活日本語のコミュニケーション活動の中から、A1 レベルの「やりとり」を抽出し、大学生のコミュニケーションを想定して、取り組んだ。

現在教室活動や教科書から離れて日本語を学習する方法も多々あり、従来の学習方法が「頭に入れる→練習する→使う」という循環だけではなく、SNS の普及により、日本語を第二言語 (Japanese as Second Language :JSL) あるいは、外国語 (Japanese as foreign Language : JFL) として学ぶかといった区別だけではない新たな日本語環境がある。「使う→練習する→頭に入れる」(村上吉丈 2018) のように日本語を学ぶ学習者も増え、新たな学習方法の提供が必要となっている。

例として「家の中で、ホストファミリーや同居人などが今どこにいるか、他の人にたずねたり、答えたりすることができる」という CAN-DO に対して (1)「行った」という問いに対する「行った」の会話だけではなく、(2)「行きましたか」に対して、「行っています」と文法形式の異なる例も収集できており、成果を文法・文型シラバスの発展に活かせるものである。

- (1) A : 木下さんはどこ行ったの?
B : 図書館に行ったよ。
- (2) A : まことはどこに行きましたか。
B : コンビニに行っていますよ。

初級文型を発展させて中級以降に学ばせる教材が多々あるが、初中級教材の『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』(筑波ランゲージグループ 1991) では、書名からも場面と機能が混在しているように、文法・文型中心に組み立てられている。中上級教材『どんなときどう使う 日本語表現文型 500』(友松悦子他 2010) でも、文型を基準として「目的・手段・媒介」「限定」「比較・程度・対比」など、30 の機能に分類して、教科書としている。こうした文型中心の教材の発想とは一線を画し、場面を重視し、CAN-DO に基づく機能で分類している。

6.3 「にほんごアベニュー」の内容

「話者」「目的」「場面」「はたらき」から、初級レベルの生活日本語を整理し、A1 レベルの CAN-DO では「話者」では、親疎間の区別、「目的」では挨拶、案内、書く、買う、飲食等、「場所」では、家、街の中、学校、職場、店等、「はたらき」では、挨拶、勧める、尋ねる等に分類されている。

〈表 1〉日本語アベニュー サンプル

CEFR レベル	CAN-DO	発話例	目的	働き	場所	文型・表現
A1	友人に家の中を案内するとき、実際に部屋を見せながら、何の部屋か、だれの部屋か言うことができる。	ここは寝室です。	遊ぶ	案内する	家	・NはNです
A1	モデル文があれば、「ご結婚おめでとうございます」「お幸せになってください」など、友人の結婚式で読み上げる短いお祝いの言葉を書くことができる。	ゆうたさん、しおりさん、ご結婚おめでとうございます。	書く	メッセージを書く	イベント	・おめでとうございます
A1	職場への訪問客を出迎えた時に、「ようこそ」「お待ちしております」などの歓迎の言葉を言うことができる。	A: 宮尾さん、お待ちしております。 B: よろしく願います。	働く	挨拶する	職場	・V ています ・謙譲語 ・よろしく願います。

6.4 「にほんごアベニュー」の特徴

「にほんごアベニュー」の特徴は、「話者」、「場所」、「場面」、「はたらき」の情報によって整理された発話・会話例の検索ができる PWA コンテンツとなっている。PWA (Progressive Web Apps) とは、Web コンテンツをスマートフォンアプリのように使える仕組みのことで、スマートフォンでホーム画面に登録することでスマホ向けアプリと同様に利用でき、より多くのユーザーが利用できる。また、「ある（詳細な）状況にふさわしい日本語の例」を確認することもでき、Can-do に沿った会話例をユーザーが自由に投稿することもできるプログラムとなっている。

謝辞

本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)研究課題「CEFR の文脈化と日本語・日本語教育研究への応用」(課題番号 21H00534、2021-25 年度、研究代表者 小野正樹)の助成を受けた研究成果の報告であることを申し述べ、謝意を表します。

参考文献

山岡政紀 (2022) 「日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(4)——研究計画と 2020 年度の活動報告——」『日本語コミュニケーション研究論集』第 10 号, 1-13, 日本語コミュニケーション研究会..

参考 URL

JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」

<<https://jlt.jinsha.tsukuba.ac.jp>>

筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター(CEGLOC)日本語・日本事情遠隔教育拠

点< <https://www.intersc.tsukuba.ac.jp/~kyoten/>>

『にほんごアベニュー』 < <https://www.intersc.tsukuba.ac.jp/~kyoten/n-avenue/>>

『リーディング・チュウ太』 < <https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp>>

(小野正樹、筑波大学人文社会系教授、ono.masaki.ga@u.tsukuba.ac.jp)